



今回は抗がん剤の副作用の下痢について紹介します。

☆抗がん剤の副作用について～その10～下痢について☆

下痢が起こる原因

下痢には、抗がん剤を投与して 24 時間以内に症状が現れる早発性の下痢と抗がん剤を投与してから数日後に起こる遅発性の下痢があります。

- * 早発性の下痢の多くは、腸の運動を抑制する神経(交感神経)と活発にする神経(副交感神経)のバランスが崩れ、腸の運動が強くなりすぎて、小腸・大腸の腸粘膜への吸収機能に障害が起こり、下痢になります。
- * 遅発性の下痢の多くは、消化管粘膜が抗がん剤により直接障害を受けたり、白血球が低下している時期には、傷つきやすくなっている腸粘膜の傷から細菌が侵入して腸炎を起こしやすいことによつて下痢になります。



下痢の副作用を誘発しやすい抗がん剤

トポテシン[®](イリノテカン塩酸塩)

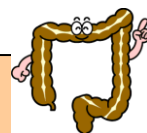
5-FU[®](フルオロウラシル)

ティーエスワン(TS-1)配合カプセル[®](テガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム配合カプセル剤)

ゼローダ(カペシタビン)[®]

ユーエフティ(UFT)配合剤[®](テガフル・ウラシル配合) など

抗がん剤で起こる下痢症状は、一過性に便の性状が水様性になるだけではなく、排便回数が増加したりします。一日3回以上排便回数の増加(頻繁にトイレに通う)や水溶性の下痢症状が続いたりした場合は、早めに主治医に連絡してください。



下痢が起こったとき注意すること

◎下痢がひどいときには脱水症状に注意が必要です。

スポーツドリンクなどを常温でゆっくりと摂取して水分やミネラルを補給するようにしましょう。

カリウムの多い食品(りんご、柑橘類、果物ジュース等)をとりましょう。

◎消化の良いものをとるようにし、食事を何回かに分けて1回の量を少なくするとよいでしょう。

腸粘膜を刺激する芋類のような食物繊維の多い食品、脂肪分の多い食品、牛乳や乳製品は避けるようにしましょう。また、香辛料をきかせた料理、炭酸飲料、コーヒー、紅茶、アルコール等の刺激のある食品は避けた方がよいでしょう。

◎下痢の際には、下痢止めや整腸剤などのお薬を併用したほうが良い場合もあります。また、症状が重い場合、点滴(注射)による水分・電解質・栄養分などの補給が必要となることがあります。

トポテシン[®]の下痢症状の予防として治療後数日間、腸管内をアルカリ化する薬(重曹・ウルソデオキシコール酸)とアルカリ飲料水、また漢方薬の半夏瀉心湯などを使用する場合があります。この場合、酸性食品(乳酸菌飲料など)は控えましょう。

トポテシン[®]の場合、投与中に副交感神経が活発になり、腸の蠕動運動亢進(腹部がゴロゴロ鳴る)・発汗・鼻水等が起こることもあります。